



2021年に注目すべきキーパーソンを選出

ニッポンを変える 100人

ピンチをチャンスに変えて
各界で活躍する才能たち

い

まだ収まらない新型コロナウイルスの感染拡大、パンデミックに伴う景気後退、迷走する政府の対策。世の在り方が大きく変わり、混沌のなかで迎えた2021年だが、こんなときだからこそ、逆境に立ち向かいピンチをチャンスに変える必要がある。その道標として、本特集では「ニッポンを変える人材」に注目した。

というわけで、ビジネス、インフルエンサー、マンガ・小説、舞台、アート、音楽、エンタメ裏方、お笑い、政治、スポーツ、グルメの各ジャンルで活動し、21年に飛躍が期待される100人を、各ジャンルの最新事情に詳しい識者がピックアップ。それぞれのジャンルのトレンドと、注目すべき才能、彼らの具体的な活動内容について詳しく解説してもらった。

まず紹介するのは、注目の起業家10人。ソーシャル経済メディア・NewsPicksの金泉俊輔氏が選出した。

「ひと昔前の起業家は、金儲け最優先の、ウェイウェイオラオラしき人たちという印象が強かつたかもしれません、今のスタートアッパーはひと言でいうと、とても真面目。社会課題の解決、生み出し

た利益による社会貢献を重視していく、本当の意味で意識が高い人たちが増えていますね。メディアによく出ていて顔は知られているけど、その実、何をしているのかよくわからない『ビジネス芸人』ではなく、実業で結果を出している人たちがきちんと評価されるようになってきています」

学生起業家が増えているのも特徴だという。

「今的学生は、企業に就職するのと並列の選択肢として起業がある。商社や外銀、コンサルは相変わらず就職先として人気ですが、一旦モラトリアム的に就職して、経験を積んでから起業するパターンも多い。そんな現況を踏まえて選んだのが、学生起業家からユニコーン企業（スタートアップ企業の中でも企業価値の評価金額が1040億円を上回る会社）の代表まで、さまざまな視点で社会変革を目指す10人。40代で独立して新たなビジネスに挑む中年起業家もいますし、SPA！読者にとっても楽しみになるのではないでしようか」

いかに儲けるか、ではなく、いかに社会課題を解決するかという意識のある起業家に、結果的に資金も集まる時代なのだ。

南野詩恵⁽³⁴⁾ 舞台芸術団体 お寿司



大阪府出身／「16年に衣装・作・演出を手がける団体、お寿司をスタート。昨年の『波濤心中』(ハローしんじゅう)は、文楽の『曾根崎心中』をベースに、自分の意思を出せない人物を人形に見立てた。突然解雇を告げられ、同僚との不倫も終焉を迎えるつある男性主人公を勤かすのは、義夫たるの周囲の憶測と不倫相手の思い。主役が最後までせりふなし、顔も隠したままの型破りな作品だった」

宮崎玲奈⁽²⁴⁾ 演劇カンパニームニ



高知県出身／「90年代以降生まれの劇作家の共通点に、見つめるといふ行為に言いたいことを託す傾向がある。AがBを見る時間、眼差しの角度、視線を外す瞬間に批評性を持たせているのだ。宮崎はそれが顕著で、しかもその視線が、スマホで撮影するような匿名性と親しみやすさを纏う。人と人がいる、それだけで影響し合う不思議を、若さに似合わぬ客観性と、若さによる瑞々しさを捉える」

市原えつこ⁽³²⁾

メディアアーティスト

36



愛知県出身／「大根をなでるとあえぎ声を出すデジタル作品でデビュー。みこしで祝う仮想通貨奉納祭だの弔いロボットだの奇特性な作品の発表を続ける。馬鹿馬鹿しさと真面目さが同居し、笑えるだけでなく、死や風習とは何かを問う眼差しもある。コロナ禍には自作機内食の発表をSNS上で焼け、自宅内でエセ海外旅行を実行。大阪万博日本館の基本構想策定クリエーターも務める」(新川氏、以下同)

小野彩加⁽²⁹⁾



舞台芸術制作スペースノットプランク
埼玉県出身／「毎回、演劇とダンスの区別がないところから出発し、野性と洗練が並立した創作を行なう。作・演出は中澤陽との共同作業だが、クラシックバレエをはじめとするダンスを学ぶ小野が、やはり動きのディレクションをリードしているはずで、さらに小野の直感的なこだわりが作品の『観たことなご』を支える。ふんわりとした外見を裏切り、精神の体幹は強靭だ」(徳永氏、以下同)

関田育子⁽²⁵⁾

演劇ユニット「関田育子」

32



東京都出身／「自身の名を冠した個人ユニットで、主宰・作・演出を手がけるが、いわゆる『名前を売りたい』『目立ちたい』的な野心は感じられない。作風も淡々として、棒読み風の発話と、抽象化され、最小限に抑えられた動きで、時間の経過、心の動き、関係性の変化を伝えており、それは能の様式美に近い。また25歳と若いが、Eテレの番組で脚本を書くなど着実に活躍の場を広げている」

中島梓織⁽²³⁾

演劇団体 いいへんじ



茨城県出身／「明るくテンポよい会話に油断していると、いつの間にか足元に、普段目を背けている社会の歪みが広がっている。短歌も詠む中島は、言葉への感度と加工能力も高い。不幸ではないが虚無感が強く、死へ引っ張られる気持ちを「死にたみ」と表現。「死にたみ」を抱えた本人ではなく、それを理解できる気持ちと、相手に死んでほしくない気持ちの間でもがく近くにいる人を描く」

写真/Dan Åke Carlsson (小野) 松本成弘 (南野)

「演劇界はこの数年、女性の劇作家、演出家の活躍が目覚ましい。かつて女性劇作家と言えば、恋愛や性体験、家族との確執などトラウマ系の話で注目された。それがようやく、そうした縛りから解放され、特に若い世代では、個人にフォーカスした物語よりも、社会全体を見つめ、そこに広がる空気、それを生み出す仕組みへの関心を足場にした創

作がデフォルトになっています。そんな中で、若いながらやりたいことにふさわしい作風を擴んでいます。才能ある5人を、35歳以下から選びました」(徳永京子氏)

「ご多分に漏れず、20年は新型コロナウィルスの影響が美術界にも及びました。美術館は休館に追い込まれ、芸術祭は中止や延期に。多くのアーティストたちは作品発表の機会を奪われましたが、しか

会を自らつくり出せる前向きなアーティストたち。なお、5人中2人は美大以外の出身者。こんな時代をサバイブするには、「よそ者の眼差しも必要なのでしょうか」(新川貴詩氏)

「20年最も名を知られた美術家・杉田陽平。婚活サバイバル番組『バチエロlette・ジャパン』に参

加し、杉ちゃんの愛称で親しまれた。彼が美術界で話題に上ったのは、炎上アート集団『じやばにか』の一員として。悪ノリに満ちた活動は競撃を買ったが、「バチエロlette」では一転、やわらかな印象に。破天荒でキテレツという世間のアーティスト像を更新したのは彼の功績といえる

選者の新川氏がこう評する現代アーティストの杉田氏だが、当の本人はどう思っているのか。

「番組参加についてはキャリアにおいてリスクのほうが大きかったです。でも、出る必要がある気がしたんです。自分が出ることで、みんなの普段の生活の中にもアートが存在すると感じてほしかった。あとは、仕事優先の人生だったので、番組が掲げる『真実の愛』という普遍的なテーマと向き合えたならな」と。そんな彼が気をつけたのは「『実の愛』に真剣に向きあっているということを伝えること」。

「邪な気持ちで参加している、と思われるるのは嫌だったんです。だつて違うから。(バチエロlette)の萌子さんに未完成の作品を見て、あなたの関わりでこの絵がどう転がっていくか

「僕でいいの?」と思いますが、やりたい気持ちもあります。表現するのに、油絵を使うこともあります。言語という絵の具で描くからこそ見える風景があると思っていました」

カラフルに活躍する杉ちゃんに今後も注目が集まりそうだ。

新川貴詩

撮影/松藤浩之

‘67年生まれ。美術ジャーナリスト。主な著書に『残像にインストール 舞台美術という表現』(光人社出版)など。展覧会企画やワークショップ講師、編集者、学校教員なども務める

徳永京子

演劇ジャーナリスト。著書に『我らに光を』(さいたまゴルド・シアターインタビューセン)、『演劇最強論』(藤原ちから氏と共著)、「演劇の街」をつくった男 本多一夫と下北沢。